



殿さまの茶わん (1)

昔、ある国に有名な陶器師がありました。代々陶器を焼いて、その家の品といえは、遠い他国にまで名が響いていたのであります。代々の主人は、山から出る土を吟味いたしました。また、いい絵かきを雇いました。また、たくさんの職人を雇いました。

花びんや、茶わんや、さらや、いろいろのものを造りました。





殿さまの茶わん (2)

旅人は、その国に入りますと、い
ずれも、この陶器店をたずねぬほ
どのものはなかったのです。そし
て、さっそく、その店にまいりま
した。

「ああ、なんというりっぱなさ
らだろう。また、茶わんだろ
う……。」とあって、それを見て
感嘆いたしました。

これを土産に買っていこう。」



殿さまの茶わん (3)

と、旅人は、いずれも、花びんか、さらか、茶わんを買ってゆくのでありました。そして、この店の陶器は、船に乗せられて他国へもゆきました。

ある日のことでございます。身分の高いお役人が、店頭にお見えになりました。お役人は主人を呼しび出されて、陶器を子細に見られました、



殿さまの茶わん (4)

なるほど、上手に焼いてあるとみえて、いずれも軽く、しかも手際よく薄手にできている。これならば、こちらに命令をしてもさしつかえあるまい。じつは、殿さまのご使用あそばされる茶わんを、念に念を入れて造ってもらいたい。それがために出向いたのだ。」と、お役人は申されました。

陶器店の主人は、正直きな男で



殿さまの茶わん (5)

ありまして、恐れ入りました。

「できるだけ念に念を入れて造ります。まことにこの上うえの名誉はございませんしだいです。」と
いって、お礼を申しあげました。
役人は立ち帰りました。

つづく

